

野村先生を送る言葉

著者	横田 玲子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	74
ページ	37-39
発行年	2021-11-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002421/

野村先生を送る言葉

横田玲子

野村和宏先生、2021年の3月までの17年間、お勤め本当にご苦労様でした。先生は2004年4月の現職教員を対象としたリカレント大学院英語教育学専攻開設と同時に着任され、英米学科の教授として多方面でご活躍されました。私は先生と同時に着任し、先生のご活躍を近くで見つめつつ、いろいろご示唆をいただきながら英語教育のフィールドで一緒に仕事をさせていただきました。野村先生のご活躍の数々は紙面には書ききれないことなのですが、いくつか思い出すままに述べて送ることばとさせていただきます。存じます。

まず、何といたっても一番に思い出されるのは、先生の「外大愛」です。それは、先生のお仕事のあらゆる面の根底にあり、常に、外大のため、外大の先生や職員たち、学生たちのため、という視点でのお仕事であったと思います。校歌をCDにされて、英語教育学専攻の新生に配布されたのはその小さな一コマだと思いますが、誰でもができることでは決してありません。先生の母校でもある外大を大切にされて、常に学生を大切に思い、同僚をいたわり、そして外大の教員としてのご自身を磨かれ続けた17年間だったと思います。

野村先生の専攻英語「発音」では、一人一人の学生の発音を分析され、助言と共にフィードバックをされておられました。またリカレントでのスピーチ・コミュニケーションAの授業は「教師は教室の中でのパブリックスピーカー。その自分のしゃべりを客観的に見なければよりよい授業はできない」とおっしゃられ、院生たちのスピーチを毎回録画し、それを本人に配布されていました。また、院生たちはスピーチをするだけでなく、それを評価する係を決められて、自分がしゃべって終わりではなく、クラスメートのスピーチのどこが良かったのか、改善点は何かなど、「教師」と「学習者」の両方を院生に経験させる授業を展開されておられました。学部でも同様に授業をされ、それについての集大成ともいえる論文は2019年の『外大論叢』第71巻第1号に「自律的学習を促す形成的学習評価とポートフォリオの活用」としてまとめられています。それを讀むと、いか

に先生が細かく学生たちのスピーチや発音を見つめ、手をかけられ、彼らを導いていたのがよくわかります。また、年度末には、必ずゼミの総括としての冊子を作られて、その年度の4年生の卒論の概要、副査のコメントを収められ、学生たちの学びの足跡をしっかりと残されていました。

私は先生と一緒に2004年度に着任して、リカレント大学院がスタートし、その翌年から文部科学省の特色GP (Good Practice) に応募することになりました。2006年度の夏前には、一次審査を通り、4人の教員が上京し大きなホテルの会場で、2次審査のプレゼンを野村先生を中心に行いました。今から15年前は、まだパワーポイントに動画を埋め込むということが珍しい時でしたが、野村先生の卓越した技術で、我々のプレゼンのパワーポイントには動画が埋め込まれ、ポータブルスピーカーを先生が持参されての発表になりました。会場に入っただけに野村先生によるあっという間の設定で、我々の発表では大学院の授業の様子が動画によって音声もはっきりと紹介され、2次審査も通り、3年間のGPの認定を受ける事が出来ました。

その特色GPの支援で我々リカレントのメンバーは2回にわたり、アメリカ、バーモント州のSchool of International Training (SIT) でリフレクションの重要性を学ぶ夏期集中講座に参加しました。緑の美しいバーモントの丘の中腹にあるキャンパスで、世界中から集まる英語教育者たちと共に学んだ日々はとても新鮮でした。外大では必ず、ネクタイにジャケット姿の野村先生でしたが、SITでは、ミッキーマウスが大きくプリントされた青いTシャツを着ておられたのがとても強く印象に残っています。

また、野村先生とは「神戸市の英語教育を考える会」という大きな会でご一緒しました。先生は座長として毎回司会をされておられましたが、この会は小中高の英語指導者の代表、各校種校長会の代表、保護者会の代表、神戸大学の外国人英語教員、いくつかの企業の代表という、なんとも壮大な、しかし、何というか、まとめるにまとまるわけのないほど、立場が違う人が混在し、それぞれの立場で神戸の英語教育の向上を考える会でした。まとまるのか！？と思うような会の進行を野村先生は、発言者を誰一人として不快にさせることなく、しかしながら、各自の発言を前向きにとらえ、さらにその発言を神戸市全体の教育制度の中に関連付けてまとめながら見事な司会をされました。横に座りながら「ははあ…そういう風に言い換えるとまとまるのか」とよく思ったものでした。

神戸外大の名前を背負われて、県内の高校への出前授業の回数は数知れず、野村先生の授業を高校で受けて「外大を目指そう！」と思った生徒たち、そしてその道を切り開きこの大学へ進学した学生たちも数多くいるに違いありません。学内ではほとんどの要職を次から次へと務められ、学生からも、多くの先生方、職

員の方からも絶大な信頼を寄せられておられました。また創立 70 周年記念誌は、野村先生ご自身の母校でもあるこの大学の記念誌にふさわしいものにするべく編集長として最終校正のために本当に多大な時間を惜しまずに使われて、素晴らしい記念誌の完成に至りました。教職課程の再課程申請の時には、教職部会長として、文部科学省が示すことについて何一つ漏れがないように教職課程内のすべての授業のシラバスを点検してくださいました。必要に応じて授業者と相談しながらシラバスの完成に努められ、外大の教職課程は、無事に再課程審査を通ることができました。

県下の高校のディベート大会のために審査員はもちろんのこと、いくつもの学校が集まり、予選から決勝までを外大で実施されるその計画から実施までも先生がご尽力されました。高校の検定教科書執筆作成にも長年にわたり関わっておられます。また全国規模の学会における理事も歴任されておられます。きっとこれらのお仕事のいくつかは外大を離れた後も、先生を追いかけて来て、先生はまだまだ現役としてご活躍されることと思います。

先生の研究室には、小川のような水音が流れ、ご在室の時はどんなにお忙しくても、ノックをしたあと、機器の相談、メディア編集のあれこれなど、必ず相談にのってくださいました。また先生の写真技術はプロ並みで、プロフィールなどで顔写真の依頼を受けた際には、いつも先生に撮っていただきました。先生のご趣味は、メディア関連や音楽、そしてカメラに留まらず、近年はいろいろなインクが本棚にズラッと並び、レアな万年筆を見せていただいたりもしました。あの研究室がもうないと思うと、学生たちも私もとても寂しいのですが、先生はまだまだ現役でご活躍！どうぞお身体に気を付けてお過ごしください。野村先生、ありがとうございました！

